
迷子は後ろを振り返らない。

はなちょこ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

迷子は後ろを振り返らない。

【Nコード】

N1990M

【作者名】

はなちよこ

【あらすじ】

主人公の里奈は小六の時に、父の母校の大学の学園祭へ行く。そこで十歳年上の古賀京太郎と出会う。

引き出しからそつと取り出した一枚のポラロイド写真。
色褪せたその写真を見て私は自然と笑顔になる。
私はこの写真の笑顔にずっと縛られたままだ。

思ったより揺れが少ないな。

私はぼんやりとそう考えた。

床につかない足を退屈を現すかのようにブラブラさせながら、目の前で楽しそうに話している両親に尋ねる。

「あと、どれくらいで着くの？」

「二時間くらいかかるかしらね」

母の言葉に父は腕時計を見てから答える。

「うん。大体そのくらいだね」

「新幹線って案外、遅いんだ」

私はそう言つて窓の外を眺めた。

初めて乗った新幹線に、それほど感動を抱かないまま。

二時間もの時間をどう過ごそうか。

そんなことばかり考えていた。

今から両親と向かっているのは

東京だった。

東京も初めて行く場所だ。

観光しに行くのではない。

伯母さんの家が東京にあることと

伯母さんの息子、つまり従兄妹の純君の通っている大学の学園祭が今日なので、その学園祭にも行ってみようと父が言い出した。

父も昔はその大学に通っていたのだ。

「懐かしいな………」

父はそう言うと言を細めた。

「昔、私もここに來たわ」

母も同じように目を細めた。

新幹線を降りて、電車に乗り換え、伯母さんの家に寄ってから、
また電車に乗って大学へ來た。

退屈で退屈で人も多くて潰されそうで、散々な目に遭った。

やっぱり今日は私は家に残って

美香ちゃんと遊びに行くべきだったなあ………。

そんなことを考えていたら、目の前にいた両親の背中が見えなくなっていた。

私の前を沢山の人を通り過ぎていく。

一瞬、「お父さん、お母さん！」と大声を出そうと思ったけど。

「いいや。今日は二人にしてあげよう」

そう呟いて私は歩き出した。

すると。

誰かに腕をガシツと掴まれた。

私は驚いて腕を掴んだ人物を見上げる。

占い師の格好をした女の人が目の前に立っていた。

「お嬢ちゃんの未来を占ってあげましょう」

女の人の言葉に私は首を横に振って答える。

「お金、ないです」

「お金はいりません」

なんだか怖い………。

逃げよう。

女の人から腕を振りほどこうとした時だった。

「なにやってんだ」

そう言っただけ現れたのは男の人だった。

赤いエプロンをつけている。

真ん中にはタコの絵。

「この可愛いお嬢ちゃん未来を占おうと思って」

女の方はそう答えると男の人が少し強い口調で言った。

「怖がってるじゃないか！」

「ああ……」

女の方はそう言っただけ私の腕を離した。

「どこから連れ去ってきたんだよ」

男の人がそう言っただけ女の方は首を傾げて答える。

「歩いて来たのよ。迷子かもしれないわね」

「じゃあ放送部に連れて行って迷子のアナウンスしてもらっ」

「ああ。そう？」

女の方はそう言っただけ私をじっと見つめた。

そして私の耳まで顔を近づけて言った。

私は男の人の顔を見た。

「なんだ？」

男の人が不思議そうな顔を女の人に向けた。

「私の占い、当たるのよ」

女の方はそう言っただけ私にニッコリ笑った。

「さあ。行こうか」

男の方は私に優しくそう言った。

「あの……」

少しだけ歩き出したところで私は思い切っただけ言った。

男の方は立ち止まって私を見る。

「ん？」

「あの……私、迷子じゃないんです」

「ってことは一人できたの？」

「うっん。お父さんとお母さん。でも二人の方がいいかな、って」
「そっか」

男の人はそう言うのと少しだけ考えてから前方を指差した。

「俺、たこ焼き屋を手伝ってんだけど、食べる？」

「でも、お………」

「お兄さんの奢りな」

男の人はそう言うのとニツコリと笑った。

たこ焼きの屋台の横にはパイプ椅子と木の机があった。

私はパイプ椅子に座らされた。

「あれ？ 古賀の彼女、若いねえー。ってか娘？」

たこ焼きを焼いていた男の人が私を連れてきた人に言った。

「何言ってるんだよ………まい………いや、ちよつと訳ありで」

古賀さんはそう言うのと私の目の前に出来たてのたこ焼きを置いた。
白い湯気が立ち上り美味しそうな匂いがする。

古賀さんは私の向かい側に座った。

自分の分のたこ焼きを机に置くと

割り箸をパキッと割った。

私も割り箸を割ろうとしたけど

やけに固くて割れない。

古賀さんの手がスツと伸びてきて私の割り箸を持っていく。

パキッと割って二つになった割り箸を私に渡してくれた。

「ありがとうございます」

「いいえ」

古賀さんはそう言うのと私を見て優しく微笑んだ。

さっきの占い師の女の人の言葉が浮かぶ。

「小学生？」

古賀さんの言葉に私は頷いてから答える。

「六年生です」

「名前は？」

「小笠原里奈です」

「俺は古賀京太郎」

古賀さんはそう言うてから、ポケットからボールペンを取り出して、近くにあった紙に「古賀京太郎」と書いた。

「大学生なんですか？」

私の問いに古賀さんはたこ焼きを頬張りながら答える。

「俺も隣でたこ焼き焼いてる鈴木も社会人。二二歳。もともと、この大学に通ってたんだ」

「里奈ちゃん、たこ焼きはどう？」

鈴木さんが額にうつすら汗をかきながら聞いた。

「美味しいです」

「ありがとう！」

鈴木さんはそう言うのとたこ焼きをひっくり返し始めた。

「古賀さんはお手伝いしなくてもいいんですか？」

私がたこ焼きを半分くらい食べ終えたところで

古賀さんにそう尋ねると鈴木さんが言った。

「そう。こいつサボってたんだよ。ダメだよ」

「俺は朝からの当番で昼からは鈴木。今、俺は休憩なんだよ」

古賀さんはそう言うて空になった

たこ焼きの容器をゴミ袋に入れた。

「あとの三人はどこへ行ったんだ」

鈴木さんはそう言うて出来上がったたこ焼きを容器にテキパキと乗せていく。

「漫研で油売ってるんだろ」

古賀さんは苦笑いしながら言った。

たこ焼きの屋台の前にお客さんが集まってきた。

古賀さんも立ち上がって鈴木さんを手伝い始めた。

私も立ち上がって、古賀さんに聞いた。

「あの……私もお手伝いします」

「いいよ、いいよー。里奈ちゃん、座っていいよ」

鈴木さんの言葉に古賀さんが言った。

「じゃあ、お客さんにたこ焼きを渡してくれるかな？」

「はい」

私がそう言うのと古賀さんがたこ焼きを渡してくれた。

「入れ物を持てば熱くないからね」

「はい」

たこ焼きの容器は厚くて素手で持っても全く熱くなかった。

いくつかたこ焼きをお客さんに渡したところで

お客さんが途切れた。

「そういえば」

古賀さんがそう言って私を見た。

「さっきの女の人……占い師の格好した人になんて言われたの？」

古賀さんの言葉に。

占い師の人の声が耳の奥でぐるぐる回る。

言つの、恥ずかしいなあ……。

私はそう思っただけにこう言った。

「忘れちゃいました」

「なーんだ。そっか」

古賀さんがそう言っただけに笑った。

本当はちゃんと覚えてる。

さっき占い師の女の人私の耳元でこう言っただ。

「あなたの運命の人は今あなたの後ろにいるわ」

その時、私の後ろにいたのは。

古賀さんだった。

古賀さんと同じタコの絵が描かれた赤いエプロンをした三人の人が戻ってきてこう言った。

「漫研からポラロイドカメラ借りてきたから写そう!」

「里奈ちゃんもおいで」

古賀さんがそう言った。

そのすぐ後。

私は両親に発見されて、たこ焼きの屋台を後にした。

古賀さんはずっとニコニコして立っていた。

もらった写真はポケットに大事にしまった。

「だーから」

佐藤がさつきより声を大きくして言う。

「そんなことより早くノートを書しちゃってよ。放課後つぶしてあげてるんだから!」

私はそう言っ自分のノートを佐藤の机の上から取り戻そうとした。

「ああ。ごめんなさい。すぐに写すから」

佐藤の言葉に私は言った。

「なるべく早くしてね」

私と佐藤だけの教室は再び静けさを取り戻した。

佐藤がシャープペンシルを動かす手を止めて

ノートに視線を落としたまま言った。

「だから、小笠原の好きな人って誰だよ」

「そんなこと聞いてどうするの?」

佐藤が少しの間、黙ってから、こう言った。

「誰も好きな人がいなかったら俺はお前に告白する。好きな人がいても告白する。彼氏がいても」

私は何も言えずに俯いた。

頭の中に浮かぶのは。

何度も何度も夢に出てきたあの人の笑顔。

一度だけ会った人。

古賀京太郎。

「ごめんね……忘れられない人がいるんだ」

私がそう言つと。

佐藤の持っていたシャープペンスルの芯がパキッと折れた。

一瞬、割り箸が割れた音のように聞こえた。

そして。

あつという間に時が過ぎて高校に入学。

一年生の間も。

二年生になつた今でも。

私が誰かを好きになることはなかった。

古賀さん以外を好きになれなかった。

「ねえねえ。冬休みに真理の彼氏とその男友達遊びに行くんだけど、里奈も行く？」

友人の言葉に私はこう言つた。

「ごめん。冬休みは予定があるんだ」

やっと。

この日 came。

「はあ」

冷たくなつた手に息をかける。

駅のホームには人がまばらだった。

ドキドキする胸を押さえて。

肩にかけたカバンを背負い直した。

財布には五万円。

この日のために貯めておいたお年玉だ。
それと。

時刻表とハンカチ。

それから一枚の写真。

カバンに入っているのはそれだけ。

二度目の新幹線は一人旅だった。

一人旅というのは表向きで。

本当はどうしても古賀さんに会いたかった。
だから一人で東京に行く。

会えないかもしれないけど。

受験生になる前に一度、行っておきたい。

新幹線の「ひかり」で東京まで一時間半。

途中で見えた富士山がすごく綺麗で。

私は夢中で窓の外を見ていた。

高いビルが多くなると。

心臓の音が大きくなった。

不安もあつたけど嬉しかった。

このどこかに古賀さんがいるんだと考えると、何かかもが愛しく思えた。

・・・・・・と言っても。

今日は平日。

学生は冬休みになつたけど。

社会人の人はまだ働いてる。

足早に歩いていくのはスーツを着た人たち。

私はいつものペースでゆっくりと街を歩いた。

すると。

目の前から歩いてくる男性を見て。
ものすごく驚いた。

あれは・・・・・・・・・・。

古賀さん？

しかし。

前から歩いてくる男性の顔がハッキリ見えたとき。

私はガツカリした。

「・・・・・・・・・・違う」

そう呟いて大きな溜息をついた。

冷たい風が吹いた。

私は肩をすくめて近くにあつた自動販売機の前に移動した。

温かいコーヒーを買って、すぐ近くにあつた階段を降りた。

長い階段を降りると、やけに開けた場所になっていた。

広場のようなその場所にはテーブルと椅子が沢山あつた。

すぐ隣にある建物が風よけになっていて、ここは風が届かず、それほど寒くない。

私は椅子に座って缶コーヒーを開けた。

「会えるわけがないのに・・・・・・・・・・」

思わず、口から本音が出た。

会えるわけがないのに。

あの時、古賀さんから

「東京で働いている」と聞いた。
だけど。

詳しくどこで、とは聞いていない。

東京に来たからと言って会えるわけではない。

偶然、会えるなんて、どのくらいの確率なんだろう？
だから。

会えるはずがないと思った。
でも。

苦しいんだ。

もう一度会いたい。

それだけを願いつけて

写真に写った古賀さんだけを見て

思い出を引っ張り出して。

それがたまらなく苦しい。

だから。

いつそのこと東京へ来てみようって。

どうせ古賀さんには会えないだろう。

そしたら。

あきらめもつくだろう、って。

「君、一人？」

その声に私はハツとして目の前を見た。

スーツを着た男性が立っている。

顔を上げて、その男性の顔を見た。

古賀さんじゃない。

「ここじゃあ寒いだろ？」

男の人は一人で話始めた。

私は黙って俯いた。

「すぐそこに喫茶店があるから一緒に入らない？」

こんな人を一瞬でも古賀さんだと思ったのがバカだった。

古賀さんはこんなに軽い人じゃない。

・・・・・・なんて思っても。

私は古賀さんの性格なんてよく知らない。

一度だけ少しの間、話ただけなのに。

私が勝手に想像して美化してる古賀さんは。

本当の古賀さんじゃないかもしれないのに・・・・・・。

「おい。聞いてんのかよ！」

男性がそう言うのと私の腕をグイッと引っ張った。
すごい力だ。

誰か………助けて………。

その時だった。

「怖がつてるだろ」

後ろで声がした。

懐かしい声。

驚いて後ろを振り返った。

そこに立っていたのは。

古賀さんだった。

古賀さんだ。

古賀さんだ。

私は思わず泣き出してしまった。

男性は驚いて私の腕をパッと離して

走って逃げていつてしまった。

「大丈夫？」

古賀さんが慌てた様子で聞いてくる。

嬉しさで泣いた、なんて言えない。

「ありがとうございます。古賀さん」

古賀さんは「えっ?!」と言つてものすごく驚いた。

私は涙を拭いてからカバンの中から一枚の写真を取り出した。

古賀さんと一緒に写った一二歳の私。

「里奈ちゃん！」

古賀さんはそう言つて笑った。

あの頃と全然、変わってない。

「覚えててくれたんですね」

私はそう言ってニツコリ笑った。

「今から昼飯なんだけど、一緒に行く？」

古賀さんの言葉に私は大きく頷いた。

今にも飛び跳ねたい気持ちを抑えて。

「一人旅？」

古賀さんがハンバーグを口に運びながら言った。

私はスパゲティをフォークに巻きながら頷いた。

「来年で受験生なんで一人旅するなら今の内かな、って」

「ってことは今、高校二年生かあ。若いなあ」

「古賀さんは二七歳ですか？」

「そう。あれ？俺、言ってたっけ？」

毎年。

誕生日が来る度に。

自分の年齢を確認すると同時に

一〇を足して古賀さんの年齢も確認する。

それが意味のない行為だと知っていても。

「しかし一人旅が東京かあ」

古賀さんがコーヒーを飲みながら言った。

貴方に会いに来たんです、とは言えない。

「古賀さんはこの近くで働いてるんですか？」

「そう。　って会社」

「あ、有名ですね。すごい」

「そんなことないよ」

古賀さんはそう言って照れたように笑った。

二七歳か……。

結婚とかしてるのかな。

チラリと古賀さんの左手を見る。

薬指に指輪が光っている様子はない。

彼女はいるのかなあ。

でも聞いたら変かなあ。

「彼氏はできた？」

古賀さんの言葉に私は思わずピーチティーを吹きだしそうになる。

私はこらえきれなくなって笑い出してしまった。

「なに？ なに？」

古賀さんが不思議そうに聞いてくる。

そんな古賀さんも楽しそうな表情だ。

「いえ。なんでもないです。彼氏はいないです」

「そっか。まあ、里奈ちゃんならすぐに彼氏ができそうだ」

古賀さんがいいです。

喉まで出かかった言葉を飲み込んだ。

「古賀さんは彼女・・・・・・・・」

私がそう言おうとした時だった。

「古賀君」

そう言っ て現れたのは。

スーツを着た女の人。

すごく綺麗な人・・・・・・・・。

「ああ。芹沢」

古賀さんがその女の人、芹沢さんを見て言った。

芹沢さんはジッと私を見つめた。

彼女。

私の頭にその二文字が浮かぶ。

「芹沢、前にさ・・・・・・・・」

古賀さんが楽しそうに芹沢さんに話し始めたので私は席を立った。

「ん？」

古賀さんが私を見上げる。

「私、行かなきゃいけないところがあるんです」

早口でそう言うのと財布からお金を取り出してテーブルに置き、逃げるようにその場を去った。

彼女じゃなくても。

周りにあんなに綺麗な女の人がいるなら。

私なんかただの子供にしか見えないんだろうな。

あきらめよう。

もう。

苦しみで心を縛り付けるのはやめよう。

「いいじゃない！ 一度だけ、ね？」

友人にそう言われて。

私は仕方なくこう言った。

「じゃあ一度だけね」

それから。

私は無事に大学に合格した。

最初は古賀さんの通っていた大学も受けようかと思ったけど、東京で古賀さんに会うことができて。

私はそこで、古賀さんへの想いにやっとな終止符を打った。

だから自分が行きたい大学を受験した。

友人に半ば無理やり誘われて行った初めての合コンは。

つまらないものになるだろな、と思っていた。

でも。

それは大間違いで。

「はじめまして。中川です」

そう言って私の目の前に座った男の人を見て、ものすごく驚いた。

中川君は古賀さんに似ていた。

「どうかした？」

中川君は不思議そうな顔で私に聞いた。

「あ、ううん。なんでもないの」

私がそう言っていると中川君は笑い出した。

「変なの」

笑顔も似てる・・・・・・・・。

私は見事に中川君に恋に落ちた。

ようやくできた二度目の恋は。

古賀さんに未練を残したままだった。

背もたれに体を預けながら、複雑な気分で窓の外を見つめていた。隣にいる健一は小型ゲーム機に夢中だ。

中川君・・・・・・・・健一と付き合い始めて五年が過ぎた。

お互い社会人になって二年が過ぎて今の生活にも少しは慣れてきた。

「あ、ねえ。富士山、綺麗だよ」

私がそう言ってもゲームに夢中な健一は何も反応しない。

三度目の新幹線。

三度目の東京。

健一が「秋葉原に行きたい」と言い出したからだ。

東京には縁があるのかもしれない。
ふと、そう思った。

そういえば。

初めて東京へ行ったのもこの時期だった。

今年も古賀さんが通っていた大学では学園祭が始まってるのかな・
・・・・。

健一の目の前のテーブルに置かれた携帯が音もなく小刻みに揺れ始めた。

健一はそれにチラリと目をやってから、ゲーム機を置いて携帯を持って立ち上がった。

「ちよつと電話。仕事の人」

それだけ言うと健一はデッキに移動した。

その横顔が嬉しそうに見えたのは。
きっと見間違いではないだろう。

「自業自得だもんね」

私はそう呟いてカバンを開けた。

色褪せた一枚のポラロイド写真。

笑顔の古賀さん。

何度捨てようと思っただろう。

でも。

できなかった。

「東京駅って人多いんだな」

健一がそう言ってスタスタと私の前を歩く。

「綾・・・・」

健一が私をそう呼んでハツとした。

「あ、ごめん！ 知り合いの子の名前と間違えた」

慌ててそう言って無理やり笑顔を作る健一。

「……………自業自得。」

私もずっと胸に古賀さんがいたまま。

健一も私の知らない女の子に惹かれたまま。

ずっと一緒にいる。

「こんなのもうやめよう」

私がそう言っていると健一が言った。

「何のことだよ」

「知ってるよ。綾って子とずっと連絡とってるのも、こっそり会ってるのも……………」

私の言葉に健一が声を荒げて言った。

「お前が悪いんだろう！　いつも俺じゃない別の方見てて！」

そして私の腕を掴む。

「行くぞ」

健一はそう言っていると足早に歩き出した。

「痛いって」

私がそう訴えても健一はかまわず歩き続ける。

沢山の人が足早に通り過ぎていく。

私の心は。

このままどこへ行くんだろう。

あの時、学園祭で両親とはぐれたとき。

私はあの時からずっと。

迷ったままなのかもしれない。

心はふわふわと思い出を漂ったままなのかもしれない。

「痛いって！」

私がそう言って立ち止まると。

「嫌がってるだろう」

後ろで声がした。

振り返ると。

そこには男性がいた。

古賀さんではない。

知らない男性。

でも。

どこかで見たことあるような……。

「なんだよ」

健一がそう言っつて男性を睨む。

「嫌がる女の子を無理やり引つ張るのは良くないよ」

男性がそう言っつと健一はスタスタとその人の前に歩いて行っつた。

「健一！」

頭に血がのぼつた健一に私の声は届かない。

その時だつた。

「鈴木、お前、どこに行つてたんだよ！」

懐かしい声が聞こえた。

目の前に現れた男性を見て。

私は驚いて声も出なかつた。

「古賀、俺はさっきトイレに行つてくるつて伝えたはずだけど」

鈴木さんがそう言つて古賀さんを見た。

「聞こえなかつたよ。つて何してんだよ……」

古賀さんが私を見た。

その瞬間。

驚いた顔をした。

「お久しぶりです」

平静を装つて私はそう言つた。

「ハハハ。なんか、すごいな」

古賀さんがそう言つて笑つた。

「知り合い？」

健一が私にそう聞いた。

「うん」

私がそう答えると。

健一は古賀さんをじっと見つめてから。

こう言った。

「俺、秋葉原、一人で行く」

「え?!」

「一人で行かせて。お願いだから」

そう言った健一の顔がやけに穏やかだった。

私は何も言えなかった。

健一はスタスタと歩き出した。

そして彼は人ごみの中に消えた。

「ヒドイ彼氏だなあ。彼女を置いて行っちゃうなんて」

鈴木さんが車窓の外を見ながら言った。

私が初めて古賀さんに会った時。

たこ焼きを焼いていたのはこの鈴木さんだった。

「自業自得なんです」

私の言葉に古賀さんと鈴木さんが私を見た。

ポケットの中の携帯が小刻みに揺れた。

健一からのメールだ。

『さようなら。今までごめん』

私はしばらく携帯の画面を見つめたまま黙っていた。

そして、ゆっくりと携帯を閉じてポケットにしまった。

顔を上げると。

古賀さんが私を優しい表情で見つめていた。

私は古賀さんに優しく微笑んだ。

ガタン、ガタン。

規則正しい音が耳に心地良い。
ううん。

心地良いのは。
すぐ近くに古賀さんがいるからだろうな。

「今年はたこ焼き屋さんじゃないんですか？」

賑やかな大学の庭を歩きながら私は二人に尋ねた。

「うん。ゆっくり見て回るのもいいな、と思ってね」

古賀さんがそう言って辺りを見渡した。

「あ、俺、ちよっと一人で回ってくる」

鈴木さんは言うが早いか走ってどこかへ行ってしまった。

私と古賀さんは黙って歩いた。

それだけでも。

私には幸せな夢のような時間だった。

「あら？」

目の前を歩いてきた女の人が立ち止まってそう言った。

「…………あれ？」

この人、もしかして……………。

「芹沢」

古賀さんが女の人をそう呼んだ。

そうだ！

芹沢さんだ。

二度目に古賀さんに会った時に
私達の前に現れた美人な人。

「あなた、里奈ちゃんよね？」

芹沢さんの言葉に私は驚いた。

「なんで……知ってるんですか？」

「占いのお姉さん。覚えてない？」

古賀さんの言葉に。

占い師の格好をした女性と芹沢さんが重なる。

「ああっ！」

私は思わず声を上げた。

「今日は旦那と来てるのよ」

芹沢さんがそう言った。

「旦那さんは？」

古賀さんがそう言うのと芹沢さんが左を見た。

たこ焼き屋の前に男性がいる。

「じゃあ、戻るわね」

芹沢さんはそう言うのと、私をじっと見つめて

こう言った。

「私の占い、当たるのよ」

芹沢さんはニツコリ笑って旦那さんのいる方へ戻って行った。

「芹沢になんて言われたの？」

古賀さんがふと聞いてきた。

私は真っ直ぐ前を見つめたまま、こう言った。

「私の運命の人は、古賀さんだそうです」

「え?!」

「ずっと好きだったんですよ。初めて会った時から、ずっと」

私の口から自然にこぼれた言葉。

一二年の片思い。

今やつと想いを伝えることができた。

頬を伝わる涙。

それを見た古賀さんがポケットから慌ててハンカチを出した。
ハンカチと一緒に何かが飛び出して

それがヒラヒラと舞って私の足元に落ちた。
一枚の写真。

私はその写真を拾い上げた。

古賀さんは恥ずかしそうに左手で顔を隠していた。
その写真は色褪せたポラロイド写真。

一二歳の頃の私が写っていた。

「会いたかったよ」

古賀さんが言った。

そして。

私と古賀さんは手をつないで歩き出した。

（おわり）

（後書き）

読んでくれてありがとうございます。

これは二年ほど前に書いた話です。

里奈が東京で二度も、しかも偶然、古賀さんと会っていますが、かなり低い確率だろうなあと思います。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1990m/>

迷子は後ろを振り返らない。

2010年10月8日14時33分発行